

「鉄」が示す狗奴国は肥後

奥野正男

図1 狗奴国と投馬国の位置 (『熊本県の歴史』参照)

古代史のハイライト「邪馬台国」に対する最大最強の敵国が「狗奴国」だったことは広く知られている。しかし文献上では、邪馬台国の「傍国」二十一国のあとに「これ女王国の境界の尽くるところ、その南に狗奴国あり」と記されているばかりで、その位置の比定に諸論がある。また、女王卑弥呼の死と、狗奴国との戦いには深い関係があるとする説も有力である。卑弥呼は狗奴国との戦いに敗れた責任を問われ、魏の皇帝からの遣使によって「死に追いやられた」とされるのである。古代の鉄器についての研究で高い評価を得ている奥野正男氏もその立場をとり、狗奴国の位置をのちの「火の国」一帯に比定する。今回の寄稿は、魏志倭人伝の方位と、弥生遺跡からの鉄器の出土を重ねて狗奴国など主要なクニの位置を比定するものである。(編集室)

狗奴国の位置 (図1、図2)

もう三十年も前のことですが、最初に書いた邪馬台国の本で、私は弥生時代の鉄器の全国県別出土数をまとめ、邪馬台国と戦争した狗奴国の強さの秘密が鉄製武器の保有にあると書きました(注1)。

当時、熊本県で四〇点以上鉄器が出た弥生遺跡は、

- ①大津市西弥護面遺跡八九点

注1資料

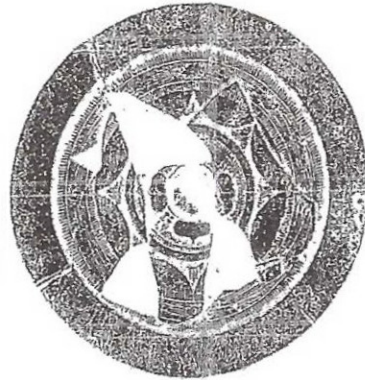
表1 弥生終末～古墳初頭期の後漢鏡出土数

| 楽浪漢墓 | 地方 | 長崎熊本 | 佐賀 | 福岡 | 大分 | 熊本 | 山口 | 中国山陰 | 四国 | 近畿 | 東海 | 関東 | 合計 |
|---------|---------|------|----|----|----|----|----|------|----|----|----|-----|----|
| (多鈕細文鏡) | | 1 | 4 | 3 | | | 1 | | | 2 | | 1 | 12 |
| II | 異体字銘帯鏡 | | 5 | 1 | 2 | | 1 | 2 | | | | | 11 |
| | 千龍文鏡 | | 2 | 1 | | | | 1 | | | | | 4 |
| III | 方格規矩鏡 | 3 | 4 | 4 | 6 | 7 | | 1 | 1 | 3 | 2 | | 67 |
| | 内行花文鏡 | | 3 | | | 6 | 1 | 2 | | | | | |
| IV | 内行花文鏡 | | 3 | | 2 | 5 | | | | 9 | 1 | | 50 |
| | 青龍三年銘鏡 | | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| | 細線式獸帯鏡 | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| | 半内彫獸帯鏡 | | | 4 | 2 | | | 1 | | | 2 | | 9 |
| V | 盤龍鏡 | 1 | | 1 | | 1 | | | | | | | 3 |
| | 双頭龍文鏡 | | | 2 | | | | | | | | | 2 |
| | キ鳳鏡 | 1 | | 2 | | | | | | | 1 | | 4 |
| | 飛禽文鏡 | 1 | 2 | 4 | 2 | 1 | | 1 | | 2 | | | 13 |
| | 斜縁二神二獸鏡 | | | | | | | | 1 | | 1 | | 2 |
| | 環状乳神獸鏡 | | | 2 | | | | | | | | | 2 |
| | 同向式神獸鏡 | | | | | 1 | | | 1 | 2 | | | 4 |
| | 画像鏡 | | | 1 | 1 | | | | | | | | 2 |
| | 位至三公鏡 | | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| | 鏡式不明 | | 1 | 4 | 3 | | | | | | | 2 | 10 |
| (平原大型鏡) | | | | 5 | | | | | | | | 5 | |
| (小形仿製鏡) | 1 | | 1 | 3 | | | | | 2 | | | 7 | |
| 後漢鏡合計 | | 7 | 20 | 99 | 27 | 2 | 2 | 8 | 4 | 20 | 9 | 198 | |

(最終加筆 2010年6月10日)



石動四本松遺跡



坊所一本谷遺跡



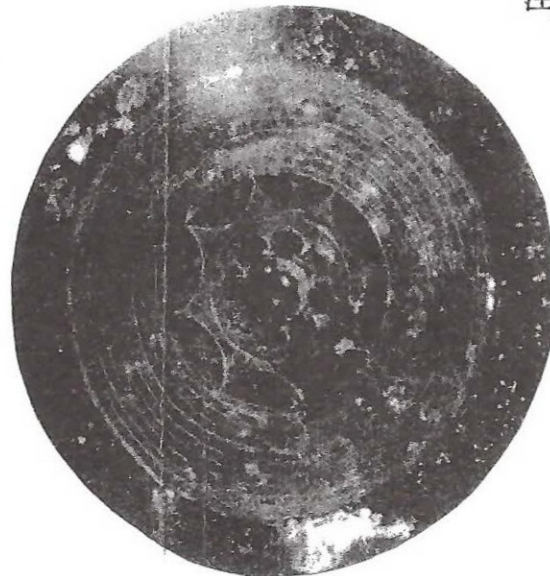
二塚山遺跡



三津永田遺跡

図3 吉野ヶ里遺跡周辺から出土した漢式鏡

注1資料



平原遺跡の内行花文鏡 (径46, 5cm国宝)



上志波屋遺跡



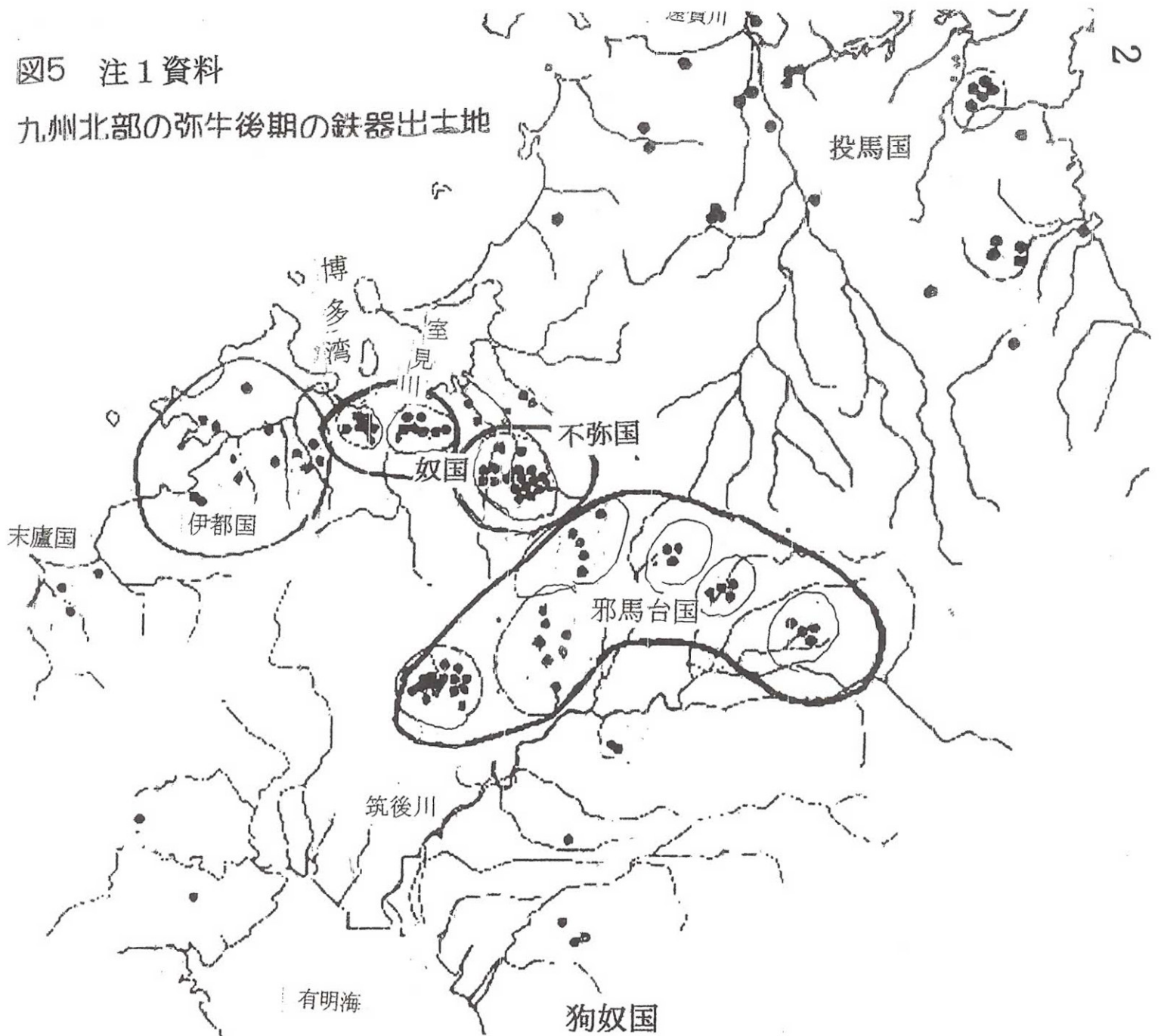
松葉遺跡



横田遺跡

図5 注1資料

九州北部の弥生後期の鉄器出土地



弥生時代鉄器出土数

1981年『邪馬台国はどこだ』より作成

| 都道府県名 | 鉄刀 | 鉄剣 | 鉄矛 | 鉄戈 | 鉄鏃 | 工具・他 | 合計 |
|-------|----|----|----|----|-----|------|------|
| 福岡 | 22 | 38 | 9 | 15 | 80 | 211 | 375 |
| 佐賀 | 7 | 7 | 4 | 2 | 4 | 22 | 46 |
| 長崎 | 3 | 17 | 3 | 3 | 15 | 54 | 95 |
| 熊本 | 0 | 1 | 0 | 0 | 6 | 212 | 219 |
| 大分 | 0 | 2 | 0 | 0 | 20 | 88 | 110 |
| 宮崎 | 0 | 2 | 0 | 0 | 10 | 4 | 16 |
| 鹿児島 | 0 | 9 | 0 | 0 | 12 | 6 | 27 |
| 山口 | 1 | 0 | 0 | 0 | 5 | 13 | 19 |
| 島根 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 11 | 11 |
| 鳥取 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 1 | 5 |
| 広島 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 12 | 13 |
| 岡山 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 19 | 20 |
| 徳島 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 香川 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 40 | 41 |
| 愛媛 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 11 | 14 |
| 高知 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 3 |
| 大阪 | 0 | 0 | 0 | 0 | 19 | 14 | 33 |
| 和歌山 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 奈良 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 合計 | 24 | 78 | 16 | 20 | 182 | 721 | 1051 |

注1資料

図4 注1資料

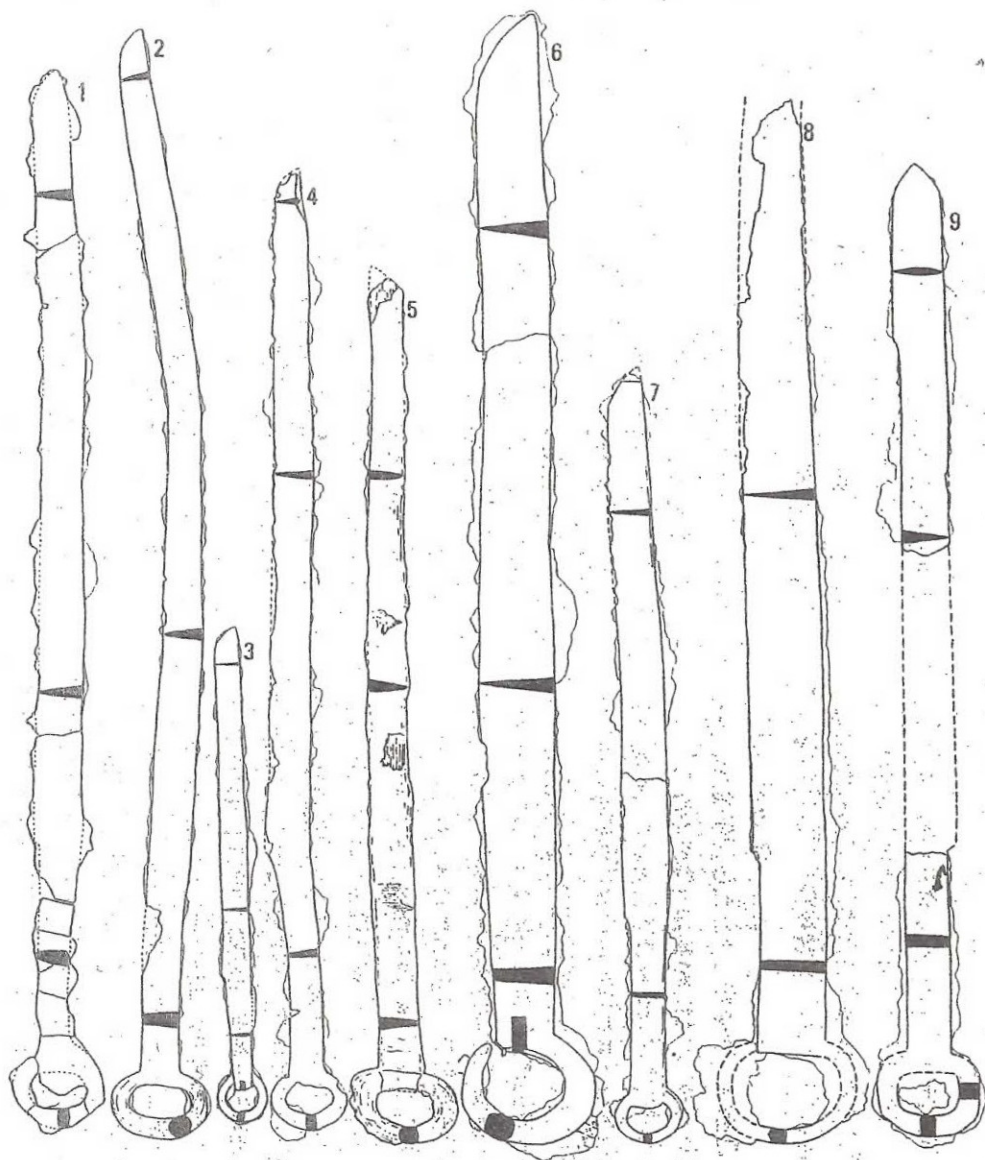
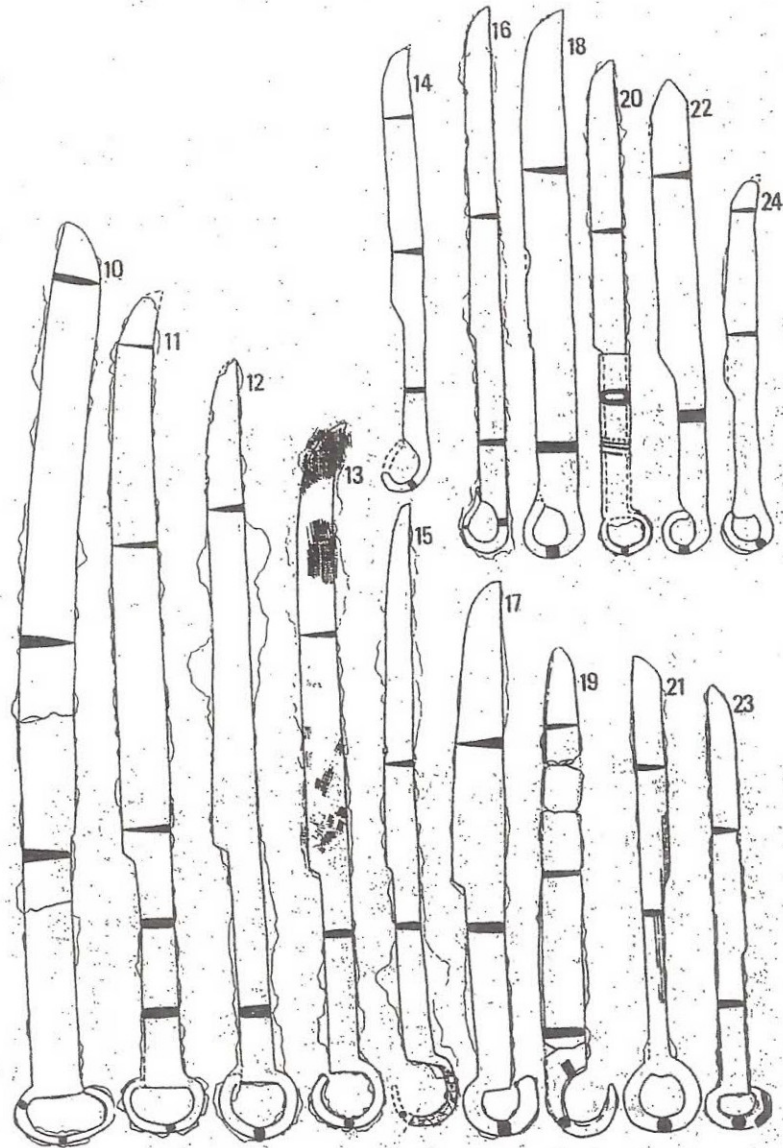


図22 弥生時代（一部、古墳時代前期例を含む）の素環頭鉄刀

- 1. 長崎トウトゴ山1号箱式石棺墓
- 2. 佐賀横田遺跡
- 3. 福岡藤崎6号方形周溝墓
- 6. 福岡丸尾台遺跡
- 7. 佐賀二塚山52号土城墓
- 8. 福岡郷屋遺跡
- 11. 福岡前田山5号石蓋土城墓
- 12. 福岡汐井掛A地区167号木棺墓
- 13. 福岡前田山9号箱式石棺墓
- 16. 福岡汐井掛A地区189号木棺墓
- 17. 福岡上り立遺跡
- 18. 山口朝田13号箱式石棺墓
- 21. 福岡立岩28号甕棺墓
- 22. 山口朝田13号箱式石棺墓
- 23. 佐賀桃島山遺跡



(番号は長～短、縮尺不同) 大半の図は注12兒玉真一氏報文から引用

- 4. 佐賀二塚山36号土城墓
- 5. 佐賀三津永田104号甕棺墓
- 9. 福岡須川山田遺跡
- 10. 福岡汐井掛A地区109号木棺墓
- 14. 山口朝田4号箱式石棺墓
- 15. 福岡松本遺跡
- 19. 福岡宝満尾13号石蓋土城墓
- 20. 福岡汐井掛A地区184号木棺墓
- 24. 山口朝田1号箱式石棺墓

前原市上町向原箱式石棺出土（5尺刀）



白川静

人衆

平凡社

桂東雜記

IV

皇室は遙かなる東洋の叡智

私は東洋の古代、ことに古代中国を研究して七十年余りになります。そうした者の目から日本を見ると、この国が世界にも珍しいほど、古代の文化、古代の精神が息づいている国であることがわかってくる。たとえば、我々が折につけ参詣する神社のなかには、『延喜式』という平安期の律令にその名を連ねる社が少なくありません。われわれ日本人はそうした神社を単なる宗教施設ではなくして、いわば聖域としてきわめて自然な畏れの感情を持っている。

古くより日本を「大和の国」といいます。この「大和」は山のあるところ、という意味ですが、なかでも『万葉集』などにも詠まれ、大切にされてきた山が三輪山です。そこには大神神社、三輪神社が祀られている。この大和の三輪山を発祥の地として、東西合わせ

て大三輪神社というのが二十四、五あります。そして大三輪という地名も、それに合わせて二十六、七ある。これは大和におった古代氏族が移動し征服した跡なのです。千数百年前の氏族の動きがこのように鮮やかに残っているのはおそろくわが国だけでしょう。たとえば中国では度重なる王朝交代の結果、氏族も大きく移動し、地名も変わってしまう。歴史は連綿と連なつてはならず、分断された断面のようになっています。

そうした古代から連なる儀式や精神を受け継ぐものの一つに、皇室があります。私は現在の皇室を云々するものではないが、そのおおもとの古代において、日本の王朝がどのような特質を持ち、どのような精神文化を体現していたのかについては、いくらか学んできました。現在、天皇家の世継ぎをどうするかという問題が、大きな論議を呼んでおります。しかし、その本来のあり方を考えるためには、やはり歴史を学ばねばなりません。そこで大和朝廷、そして殷という東洋の古代王朝に遡り、いまの我々にも連なるその文化の特質を考えていきたい。

神話体系を持つ王権

日本が古代から受け継いできた文化は、この列島のみには伝わる文化ではありません。私が考えるに、ひろく東アジア世界が古代から育んできた文化が、いまもわが国に根づいているのです。ことに殷という、紀元前十六世紀に創始されたきわめて古い王朝と、日本の古代皇室とは、深い共通点を持っております。

たとえば、現在でも天皇の即位儀式である大嘗祭では、真床まじこ覆衾おほすまという儀式を行ないます。これは先帝の霊を衣に移して、新しい天皇が受け継ぐという儀式なのですが、そもそも「衣」に霊が移るといふのは、殷とも共通する信仰です。霊をものに移す「依代よしろ」、「憑依する」の「依」に衣という字が入っておるのはそのためです。また、「喪」「哀」などの文字に衣が入っているのも、死葬において霊の保存や復活に、衣が使われておったことを表わしている。

殷と古代日本とのもつとも本質的な共通点は、神話の存在です。ここでいう「神話」とは、その民族の生活の背景にある世界を説明する、一つの体系である。天地の創造譚にはじまり、自然界の秩序、人間の世界の秩序を説明する神話があつて、それを統べる王家の系譜を表わした王統譜を備えたものが、典型的な古代王権の神話体系です。たとえば古代

三 神聖王朝の構造

殺される王 地下のピラミッドといわれる壮大な殷代陵墓の遺構をみるものには、ここに眠る殷王が、絶大な権力をもって神聖王朝に君臨していた姿を想見することができよう。

玄室にとろせましと納められた副葬明器の遺品、盛装のまま王の周囲に眠る数多くの殉葬者、陵墓への通路やその両側は、ときに数百にのぼる断首葬をもって守られている。車馬坑には、生前さながらの車馬の装いが、御者とともに葬られている。それはおそらく、生前の王の生活を、地下に再現したものであろう。

たしかに、殷王の権威は絶大であった。また王は最も神聖なものとして、すべての祭祀や儀礼は、その神聖性を保有し、証明するためであったといっても、過言ではない。王の行為は、つねに貞人によってトせられ、神意に問われた。戦争や田獵など、危険を伴うときはもとより、平時の出行のときにも、「往来に災亡なきか」というトいが行なわれた。王の行動する空間は、つねに貞トによって清められていたのである。空間ばかりでなく、時間もまた修祓の対象であった。旬末に次の一句の吉凶をトするト旬は、甲骨文の五期を通じて、必ず行なわれていた。夜は精霊の活躍するときである。それで夕ごとに、「今夕、尤亡ときか」というトいがなされた。また軍事の行動中には、ただ「王をトす」というトいが、同時に十回もくりかえされた。これらは、トいといっても、答えを要求するものでなく、儀礼に近いものである。それは、貞トの

形式をかりた、魂振りの儀礼と解してよい。わが国では、王朝時代に、月ごとに天子の招魂が行なわれ、また日々にも招魂の儀礼がなされているが、ト辞におけるト旬・ト夕・ト王はそういう性質のものである。それはいわば、時間的な修祓であった。王は場所的にも時間的にも、つねに修祓によって守られていたのである。

しかし王が神聖とされるのは、必ずしもその権力に由来するものではない。権力は、その神聖性の結果として生まれたのである。王の神聖性は、王が神と人との媒介者として、いわばその通路であったことに本づいている。『説文』は王の字形を、天地人三才を貫く意を示すものとしている。漢代に支配的に行なわれた天人合一の思想、王は天地の秩序者であるとする考えが、この解釈の根拠にある。しかし王(囟四左中央)の初形は鉞まさかりであり、上下三画の字形となつてからも、上の二画は下の一画とはなれてかかれています。『説文』の解は字形解釈としては誤りであるが、伝統的な王の觀念を示すという点では正しい。王は自然の秩序を人間の生活に適応させるために、神につかえるものとしてえらばれた。未開社会では、王はしばしば山腹の小屋に孤独な生活をして、神に祈りをつづけ、もし自然がその秩序を失って、大旱や大雨がつづくとき、神意にかなわぬものとして殺されたり、追放されたりした。フレーザーの『金枝篇』(第二十四章)には「殺される王」という一章があって、その事例が集められている。王は孤独なる犠牲者であった。堯のとき、許由きよゆうは天下を譲ろうといわれて、いそいで潁川えいせんに耳を洗つたといふ。殷の祖王とされる湯もまた、巫祝王であった。湯のとき、七年にわたる旱魃かんぱつがつづいた。地



図13 甲骨文・日・帝・奠・我の字がみえる

上では、金石もとけて流れ、すべてのものが生色を失った。湯はこれを救うために、髪を断ち爪を剪り、潔齋して積薪の上に坐し、自ら身を焚いて雨を桑林の社に祈ろうとした。すべての準備が整ったとき、天はにわかには沛然たる雨を降らせて、地上はようやく蘇った。桑林の社は宋の聖地であるが、このことを記念して桑林の舞樂が伝えられ、のちそこでは、雨乞いの舞や、歌垣なども行なわれるようになった。

時代ははるかに下って、湯の子孫である宋の景公（前四五三年）のとき、また大旱があった。景公は自ら古々を苦しめた。これを卜したところ、人を犠牲として祈れということであった。景公は自ら古儀の定めているように、薪を積みあげてその上に坐し、身をもってこれに当たろうとしたところ、たちまち大雨があつて旱を免れたという話が、『莊子』の佚文として伝えられている。莊子の時代とあまり遠くないころの話であるから、かなり確かな伝承であろう。

古くは巫祝王自らの責任に帰せられていた旱魃や大雨は、のちには巫祝を犠牲として祈られた。旱は形声の字で、嘆・饑などの字形に含まれている奠（図一三）が、その初文である。その字形は、巫祝が雨乞いののりとである口を戴き、両手を前に交して縛され、ときには下に火を加えて、焚殺されることを示す字形である。その字がすでに卜文にみえていることからいえば、実際に焚殺されたのはこれらの巫祝であろう。『左伝』（僖公二十一年）や『礼記』檀弓（下）には、

ひでりに巫を焚く話がみえている。王はおそらく巫祝王として、その象徴的な儀礼に参加したのであろう。そしてそういう巫祝王の伝統は、湯の時代から千数百年のちにおいても、宋の国ではなお生きていたのである。前漢時代の思想家董仲舒の『春秋繁露』（求雨篇）にも焚巫の俗がみえているから、その俗はのちまでも知られていたのである。

殷代には、王は巫祝王であるよりも、むしろすでに司祭者であった。巫祝王としての性格は、重要な卜いについて、王自らが占断をくだすという事実のうちになお残されているが、安陽陵墓のうちに眠る殷王は、すでに巨大な権力の行使者であった。しかしそれでもなお、政治は神との交通を通じて行なわれた。そこには、祭政一致の形態がとられていたのである。

祭祀の体系

国の大事は、祭祀と軍事にあるといわれている。卜辞にあらわれる祭祀には、自然神に対するものも多いが、定例的に行なわれている祖祭が最も多い。祖祭は一つの体系をもつて行なわれた。それは五祀とよばれ、彫・翌・祭・截・瘞の五祀を、一定の次序をもつてくりかえしてゆく。そのような祖祭の体系を通じて、殷王朝の系譜も明らかにされた。それによると、祖祭は上甲からはじめられている。それ以前は先公とよばれる神話的祖神で、いわば神代である。それらの諸神は、その系譜的な関係をたどることもできない。なお五祀のほかに、衣祀とよばれる直系の王のみをまつる祭祀がある。この両者によって、殷王の系譜を復元しうるが、その結果は『史記』の殷本紀に伝えるところとわずかな相違があるのみで、殷本紀の伝承がきわめて正確なものであることが知られた。甲骨文が出現する以前には、殷本

白川静

後期万葉論

- 第一章 分岐について
- 第二章 七夕の歌
- 第三章 表記法について
- 第四章 仮合即離の境涯
- 第五章 旅人讃酒
- 第六章 家持の軌迹

第二章 表記法について

一 最古の劍銘

わが国の古代文化は、初期農耕の時代からすでに、東アジアの先進地帯の影響を受けながら発展した。銅鐸・銅矛・銅戈など、その祭式に用いた古い青銅器文化は、西日本に濃密な分布をみせており、同じく祭式に用いられた鏡も、多紐細文の韓鏡をはじめ、中国の漢・新・後漢鏡が西日本から出土、これも北九州・近畿・瀬戸内地区に出土が多い。これら政治・経済と深くかかわる文物は、概ねその技術とともに外から移入されたものであり、時期的には古墳前期に及んでいる。古墳時代は、各地に政治的統一がようやく胎動しはじめた時である。

よく知られている埼玉県稻荷山古墳出土の鉄劍には、

辛亥年七月中記。乎獲居臣、上祖名意富比埜、其兒(名)多加利足尼……其兒名乎獲居臣、世々為杖刀人首、奉事来至今。獲加多支鹵大王寺、在斯鬼宮時、吾左治天下。令作此百練利刀、記吾奉事根原也。

辛亥の年、七月中記す。乎獲居臣の上祖の名は意富比埜、其の兒の名は多加利足尼……其の兒の名は乎獲居の臣、世々杖刀人の首と為り、事へ奉り来りて今に至る。獲加多支鹵の大王の寺(館)、斯鬼宮に在す時に、吾れ天の下を左け治む。此の百練の

利刀を作ら令め、吾が事へ奉れる根原を記すなり。

という銘があり、「獲加多支鹵」は雄略、辛亥はおそらく四七一年、その六年後に倭王武が宋に方物を献じている。

これよりさき、熊本の江田船山古墳出土の劍銘に、

治天下獲加多支鹵大王世……八月中……上好□刀。服此刀者長寿、子孫注々得其恩也、不失其所統。作刀者、名伊太加、書者張安也。

天の下を治めたまふ獲加多支鹵の大王の世……八月中……好□刀を上る。此の刀を服く者は長寿にして、子孫注々（洋々）として其の恩びを得て、其の統ぶる所を失はざらむ。刀を作る者は、名は伊太加、書る者は張安なり。

とあって、これも雄略期のものである。この当時、鑄劍などのことに従う者はみな異邦の渡来者であった。東北では蝦夷の俘囚を各地におき、近畿や西国では夷俘郷・俘囚郷とよばれた。かれらは製鉄のことに従事し、その周辺には製鉄の遺址があり、技術者が聚居することが多く、たとえば播磨賀古郡夷俘郷の隣接地三木市石野には韓鍛の石野氏が鍛冶の事に携わっていた（柴田弘武氏「俘囚と産鉄」、『東アジアの古代文化』七四号）。他の文物や技術も、ほぼ並行して移入されたとみてよく、その傾向は、のちになるほど加速されていたと思われる。

渡来した定住者は、のち『新撰姓氏録』に各国諸蕃として録するものすべて三七一氏、

そのうち漢一七七、百濟一二〇、高麗四八、新羅一七、任那九、漢と百濟とで八割をこえる。漢人と称するものも、韓あるいは韓経由のものが多かったと考えられ、秦の始皇帝の後に称する秦氏も「うづまさ」の姓を賜うており、「うづまさ」は族長の意の朝鮮語であるという（佐伯有清氏『新撰姓氏録の研究』考証篇四、三六〇頁）。秦氏のように、漢人村主を称するものは、三十氏に及んでいる。渡来者の多くは近畿やその周辺に住んだが、江田船山・埼玉稻荷山古劍のように、早くから辺地で活躍していたものもあり、銅鐸・銅矛の時代以来、地方豪族のある所に、今來の技術を擁するかれらの活躍の場所があった。そして中央の権力が強大となるにつれて、政治の中枢にあって絶大な権力を掌握する蘇我氏のような大族が生まれた。蘇我氏は専権の末、大化元（六四五）年、中大兄・中臣鎌足に滅ぼされるが、のち天武の八色の姓賜与のとき、その五十二氏中、蘇我系は巨勢・平群などなお十九姓あり、その三分の一近くを占めていた。

四、五世紀の応神期のころ、西史の王仁・秦氏の弓月の君、東漢の阿知使主などが渡来、五世紀後半には南朝の文化を伝える百濟・任那の人びと、また六世紀中葉には高句麗の文化を伝える諸族が来帰、七世紀中ごろ、天智期に百濟が滅亡し、このとき数千人の亡命者があった。古い渡来者である漢人と、のちの渡来者である今來の人とによって、わが国に大陸・朝鮮の新しい文化と技術とがもたらされたが、特に集団的な移住者は、その生活態のまままで移動してきたので、かれらの旧慣によって聚落を作り、その信仰によって

倭の女王卑弥呼の最期——「以死す」再考

岡本健一

はじめに——『魏志倭人伝』の「以死」をめぐる

倭の女王・卑弥呼は三世紀半ば、宿敵・狗奴国との戦闘のさなかに死んだ。『魏志倭人伝』は、その死を唐突かつ簡潔に「卑弥呼、以死す」と伝えるだけである。このため、女王の死因をめぐる、早くから(1)自然死説と(2)戦死説が出ていたが、一九七〇年代から作家・松本清張らの主唱する(3)王殺し説が加わって、多岐にわたる邪馬台国論争をいちだんとにぎわした。

私は十年前、小著『邪馬台国論争——卑弥呼の迷宮』をまとめたとき、とくに「卑弥呼、以て死す」の項をたて、鼎立する三説を整理・紹介した。さいわい昨二〇〇三年春、「史話日本の古代」シリーズの第二巻『謎につつまれた邪馬台国』(直木孝次郎編⁽²⁾)に採録された。その縁であろう、昨秋、『松本清張研究』古代史特集号に「清張の邪馬台国論」を執筆する機会を与えられたのだが、久々に清張説を再検討した結果、「王殺し」説

こそ清張邪馬台国論の最大の学的貢献であること、しかも邪馬台国問題のなかでも重要な位置を占めることに、思いいたった⁽³⁾。

前稿では、『史記』夏本紀の著名な「繇の最期」と比較して、いささか清張説の正しさを傍証しえたかと思ふ。ここでは、「以死す」の用例をいまま少し広く日中兩國の文献のなかに探り、秘められた「卑弥呼の最期」を明らかにしたい。それは同時に、「卑弥呼とはたれか」「箸墓はたれの墓か」「対狗奴国戦争とはなにか」など、古代史上の大問題に迫る手がかりもえられる、と期待されるからである。

1 「以死」の解釈

『魏志倭人伝』によると、卑弥呼は正始八、九年(二四七―八年)ころ、狗奴国の男王・卑弥呼との戦いの渦中で死んだ。卑弥呼の最期と前後の情勢は、『魏志倭人伝』にこう記されている。

(ア)其の(正始)八年、太守の王順、官に到る。

(イ)倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥呼と素より和せず。倭の載斯・烏越等を遣はして郡に詣り、相攻撃する状を説く。

(ウ)郡の太守は「塞曹掾史の張政等を遣はし、因りて詔書・黄幢を齎し、難升米に拝反し、檄を為りて之に告諭せしむ。」

(ニ)卑弥呼、以死す。
 (オ)大いに冢を作る、徑百余歩。徇葬する者、奴婢百余人。

問題の(ニ)「卑弥呼、以死す」は、A「以(すでに)死す」と訓むか、B「以て(もって、よって)死す」と訓むかによって、意味が変わってくる。死因も(1)自然死、(2)戦死、(3)殺害(王殺し)の三様の解釈が生まれる。さらに、C「死するを以て」と訓む人もいる(なお、この場合、かつては「卑弥呼死するや」とも読まれた)。訓み方と意味・死因を整理すると、つぎの表のようになる。

●「以死す」の読み方

| 訓み方 | 文節関係 | 意味 | 死因 | 主唱者 |
|----------|-------|----------|--------|------------|
| A 以に死す | 連続・継起 | すでに死んだあと | (1)自然死 | 内藤湖南・三木太郎 |
| B 以て死す | 発語・強調 | 死んだ | (1)自然死 | 本居宣長・石原道博 |
| | 因果関係 | そのとき死んだ | (2)戦死 | |
| | | その結果、死んだ | (3)殺害 | 阿部秀雄・松本清張 |
| C 死するを以て | 独立・時間 | その後、死んだ時 | (4)不特定 | 伊瀬仙太郎・三品彰英 |

A「以に死す」なら、(1)「自然死」を意味する。(ウ)の「檄を為りて之に告諭せしむ」と(ニ)「卑弥呼、以に死す」の前後二文の間には、直接の因果関係を認めず、時間的な継起をしめすものとする。段落も「告諭せしむ」

む」で変わる。内藤湖南・上田正昭・佐伯有清・三木太郎ら、多くの文献史家がこう読む⁽⁴⁾。

B「以て死す」なら、発語の場合、(1)「自然死」を意味する。岩波文庫版『魏志倭人伝』の編訳者石原道博・直木孝次郎・原田大六・山尾幸久をはじめ、多くの研究者の読み方である⁽⁵⁾。前文との因果関係を認める場合、(2)「戦死」を意味する。(イ)「倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥呼と素より和せず。倭の載斯・鳥越等を遣はして郡に詣り、相攻撃する」渦中に、戦死したと考えられる。段落は(ウ)の「告諭せしむ」で終わらず、(ニ)「卑弥呼、以て死す」をへて(オ)「大いに冢を作る、……」までつづく。

卑弥呼の死は二四七〇八年、七十歳代のことらしい。戦時で高齢という点からみて、(1)自然死(老衰・病死)と(2)戦死の双方のケースが考えられよう。

C「死するを以て(死するや)」なら、死因は特定できない。後文の(オ)「大いに冢を作る」にかかり、「卑弥呼が死んだので(死んだとき)、大塚を作った」の意となる。伊瀬仙太郎・三品彰英らが主張した⁽⁶⁾。

2 「王殺し」説の登場

このように、訓みも解釈も帰一しなかったが、一九七一年、在野の古代史研究家・阿部秀雄が『卑弥呼と倭王』ではじめて(3)「殺害」説を唱えた⁽⁷⁾。「以死」を「以て死す」と訓む点では、(2)の「戦死」説と同じだが、直前の一句、(ウ)の「檄を為りて之に告諭す」との間に直接の因果関係を認め、「郡使が檄を示して告諭した結果、死んだ」と解釈した。なぜなら、『三国志』鮮卑伝には「解諭」という表現があって、「普通では承服できない

事柄を説得して承服させる」難事件解決の場合に使われているからだ。しかも、『魏志倭人伝』では「以（もつて／それにて）死す」と書かれている。したがって、卑弥呼や難升米も郡使から、無理無体に「（狗奴国王に倭王の位を譲るよう）告諭」され、「その結果、卑弥呼は死んだ」と読むべきだ、というのである。

じつは、これより早く、栗原朋信が「以て死す」殺害」説に言及していた。まず「卑弥呼、以て死す」と読みたいところだが、こう「読むとなると、魏が檄を為つて難升米を告諭したために卑弥呼が死んだことになつて、魏と女王卑弥呼との接近関係が、反対の結果を招来したことになるので理解に苦しむ」として、これを採らなかつた。かわりに「已に」説にしたがった、という。⁽⁵⁾ 栗原のためらいは、示唆的である。（後述）

ついで、作家の松本清張が阿部の「殺害」説に与し、民族学上の「王殺し」の習俗とつがえて解釈した。すなわち対狗奴国戦争の敗北の責任を問われ、部族長らに殺された、と「王殺し」説に押しひろげたのだ。考古学者の奥野正男は、卑弥呼に告諭・問責して死に追いやつた、と考えた。なかで、清張はもっとも詳しく、かつ繰りかえし説きつづけた結果、邪馬台国論争に新しい争点をすえた、といえよう。今日、古代史家のなかで支持する人は、かならずしも多くないけれど、在野の古代史研究者・ファンの間では、共鳴する人が多いように見受けられる。

清張が論拠としたのは、つぎの三つの事例である。⁽⁶⁾

第一に、『倭人伝』にみえる「持衰」。倭人は航海の間、持衰を選んで、垢まみれのまま謹ませた。もし、船が暴風に遭つたり、航海者が病氣になつた場合、たちまち持衰を殺した、と記す。清張はこの持衰に注目した。失敗の責めを負つて殺される持衰のように、卑弥呼もまた、倭国安寧のため持衰として生き、持衰として責め

を負つて殺された、とみた。

第二に、『魏志』夫余伝にみえる麻余王殺害の記事。「旧、夫余の俗に、水旱調はず五穀熟らざれば、輒ち咎を王に帰し、或いは当に易ふべしと言ひ、或いは当に殺すべしと言ふ」とある。そこで、麻余王は死に、六歳の王子が後を継いだという。この事によって、古代朝鮮でも「王殺し」の風習があつたことがうかがえる。しかも、『魏志』夫余伝／倭人伝では、「共立」された王／女王が責めを問われて死んだあと、幼少の王子／宗女が立つ、という文章の構造と情況の設定が、共通している。「卑弥呼の殺害」を暗示するかのようである。

第三に、古代世界に広くみられた「王殺し」の習俗。周知のとおり、民族学者J・G・フレージャーの『金枝篇』によると、古代の王は呪術師・魔術者・祭司王であり、健康や勢力が衰えはじめると、いつでも後継者によつて殺された。とくに、早魃・飢饉・敗戦などのような公的災禍が彼の生命力の衰退を示すようにみえる場合には、殺されることが多かった、という。

清張は、右のような倭・夫余を含む世界的な「王殺し」の習俗を引いて、大胆に推定した。「狗奴国との敗戦によって彼女の力が衰退したことが証明された。もっとも、老齢でもあつたから、呪力もおとろえていたであろう。かくて卑弥呼は重大な敗戦の責めにより、諸部族長らに殺された」と。

3 「王殺し」への賛否

清張らの「女王殺し」説をめぐる、もちろん、反論も出た。

医師で古代史研究者の白崎昭一郎は、同じ『魏志』傳説伝に「今(孫)権、以死し」とある例をあげ、孫権は殺されたのでも詰め腹を切らされたのでもなく、自然に病死したのであって、卑弥呼の場合も自然死とするほかない、と説いた。⁽¹⁰⁾ 民族学者の大林太良は、倭国でも夫余型の「王殺し」つまり「神聖弑逆」がおこなわれたとは即断できない、と留保した。⁽¹¹⁾ 中国人の謝銘仁は「以て死す」を「訓読みによるまったくの間違い」と一蹴した。⁽¹²⁾

これにたいして、奥野正男は清張に同調・補強した。「檄」で示し、口頭で内容を「告諭」し、そのつぎに結果を記す文例を、『三国志』などからあげたうえ、「以死」は「よって(それがために)死す」つまり「死に追いやられた」殺された」と解釈した。⁽¹³⁾ 奥野はさらに、「檄」の内容は、倭国の王位交替(王のクビのすげかえ)をつよく求めたもので、魏(帯方郡)が軍事力をちらつかせながら、倭国内の安定をはかろうとしたとみた。⁽¹⁴⁾

のちに大部な『邪馬台国研究事典』をまとめる三木太郎は、阿部・清張・奥野の新説にたいして再三、きびしい批判をあげた。郡使・張政の任務は、倭国の指揮官・難升米に詔書と黄幢を授け、檄によって難升米に對狗奴国戦の方策を与えることであって、阿部が「狗奴国王を倭王に擁立するため、卑弥呼を殺害させた」と説くのは、謬説もはなはだしい、と責めた。また、「告諭」の例を『三国志』のなかから博搜し、強制して刑罰を科する信賞必罰より、信賞懐柔のケースが多い。「告諭によって卑弥呼が死に追いやられたと判断することは、幻想に過ぎない」と退けた。さらに、それほど重大な告諭が、なぜ難升米ではなく、卑弥呼に向けられなかったのか。以(すでに)死んでいたからだ。「魏朝から死をたまわった」などの臆測を生じる可能性は皆無、と斬り捨てた。⁽¹⁵⁾

奥野もくりかえし自説を補強している。はじめに掲げた『魏志倭人伝』の記事(上のア・オ)をいま一度追うと、正始八年(二四七)以後の倭国内と帯方郡の緊迫した情勢がよくわかる、という。すなわち、

(ア)郡太守王頌が急遽、洛陽の官に上り、倭国情勢を報告・協議した。

(ただし、ここは、帯方太守・弓遵の戦死したあと、新任の王頌が帯方郡の官衙に着任した、と読むのがふつう)⁽¹⁶⁾

(イ)卑弥呼が帯方郡に特使を派遣、狗奴国戦争の状況を訴えたからだ。

(ウ)太守は帰任すると、ただちに塞曹掾史の張政等を倭国に特派した。

(エ)郡使は詔書・黄幢を難升米に授け、檄を作って難升米に告諭した。

そして、問題の(オ)「卑弥呼、以死す」とつづく。さらに、このあと

(カ)男王を立てたが国中が服さず、千余人の死者をだす争乱となった。

(キ)ふたたび宗女の台与を立てて王に戴くと、ついに国中が定まった。

(ク)郡使は台与に檄で告諭し、平和回復を見届けたあと、郡に帰った。

奥野によると、『倭人伝』のこの一節は「時間の流れにしたがって一連の事件を順次記し」たもので、告諭以前に卑弥呼が死んでいた、と深読みする根拠はない。魏の対朝鮮政策が徹底した軍事支配につらぬかれていたと同様、対倭政策も重装備の兵士団を率いて倭王の交替を迫るものだった、と解釈した。⁽¹⁴⁾

賛否両論の最後に、共感をしめす佐伯・直木の見方と、中国の沈安仁の批判をあげておこう。

佐伯は先の『魏志倭人伝を読む』で、「卑弥呼、以に死し、大いに冢を作る」と読み下し、「老衰」とみてい